

骨は収集されていないのではないかと心を痛めております。私の記憶では、一緒に帰還し、舞鶴に上陸したのは四六七名であったと思いますが、五百余名について、死亡、入院などで、詳細は残念ながら分からない。

### 【執筆者の紹介】

住所 岩手県宮古市津軽石一四一―一八―一

入隊前の経歴 工業専門学校在籍 南満州鉄道在職

主な軍歴 満州独立工兵七三三部隊 四十一日間

引揚後の職歴 昭和二十四年四月 三菱金属鉱業株式

会社入社

(岩手県 田辺 壮久)

### 繰り上げ徴兵検査で抑留者

岩手県 佐藤 欽 一

大正十四年九月五日、岩手県盛岡に生まれる。

昭和十九年一月二十四日、釜石駅車号掛を命ずる命令を受け、釜石製鉄所にて生産される鉱石、鋼材の輸送に従事していましたが、その年、繰り上げ徴兵検査(十九歳)が行われ、現役兵と認定され、いつ召集令状がくるか緊張の毎日でした。

明けて昭和二十年二月、弘前東部五十七部隊に二月十日十時までに入隊せよとの令状を受け、二月九日、吹雪の中を盛岡駅発、青森経由・弘前へ。十分時間間に合うはずが、列車は青森操車場より進むことができず、やむを得ず車中に一泊するはめに。あまりの寒さに車内で新聞紙を燃やし暖をとる者もあり、翌朝弘前駅に到着したときは十時過ぎ、駅前より全力疾走で部隊へ。何とか初年兵としての生活が始まりました。

私の配属先は第一機関銃中隊第一大隊砲小隊でしたが、弘前での生活は演習もなく全くのお客様待遇、不思議に感じていましたが、そのとき既に満州より初年兵引率の班長殿が来ており、入隊一週間で満州に転属。軍事列車に乗せられたが、そのときの我々の軍装は、木製の弁当箱（飯ごう）、竹筒一本（水筒）、帯剣は四人に一本、これでも帝国現役初年兵の出陣であった。

故郷盛岡を通つたのは夜中の十二時、もちろん親にも内緒で通過。博多より輸送船にて玄界灘を渡り、釜山港に上陸、軍用列車にて満州入り。白阿線（白城子より阿爾山に至る）に入り、約二五〇キロメートル走り西口駅と五叉溝駅ごさこうの中間付近で列車が止まった。そこはなだらかな丘陵で、線路より頂上に向かって土饅頭のような物が無数に並んでいた。ここがこれから私たちが起居を共にする一〇七師団歩兵第一七七連隊満州第二〇一部隊の三角兵舎だったので。「下車の命令により満州の大地への第一歩が」と言えば格好がよいのですが、そのときの気温が零下四〇〜五〇度、体感温度が零下七五度もあり、連隊長も、本日は寒さの

ため訓示はなし、直ちに兵舎に入れとのこと。その日の夕食は天ぷらに赤飯、初年兵を歓迎してのお祝いかと、よくよく見れば、何と精製されていないコウリヤン飯、全く世の中は甘くない。その後も夕食に天ぷらが付いたときは必ずコウリヤン飯だったと記憶している。

弘前入隊時に配属された第一大隊砲小隊は、十一名の初年兵に対して軍馬が二十一頭、大隊砲二門。生まれて初めて馬の世話をすることになったが、習うよりも慣れるで、何となく一期検閲も済ませ星二つの一等兵となり、ソ満国境付近に大隊砲の陣地構築又は対戦車攻撃の演習に明け暮れておりましたが、運命の八月九日、私は砲の手入れ及び厩の当番となり、国境に出陣せず残っていました。

昼ごろ、突然ソ連の戦闘機が数十機飛来し、兵舎直撃の機上掃射を受けたが、緊急避難し、人馬とも大した損害も受けなかったと記憶している。

八月十二日、五叉溝の市街が空襲により炎上。国境警備中、第一大隊は興安に南下するとの命を受け、作

業服のまま、兵舎にも寄らず着の身着のまま出発。八月十四日、西口にて第一大隊砲小隊は軍馬と大隊砲を守りながら薄暮戦闘に突入。状況を見るところか、何ぶん初年兵として弾の下をくぐるのは初体験、思わず馬に逃げられないように手綱を長くして付近の車の下にもぐり込み、頭隠して尻隠さず、周りを曳光弾が蛍のように飛んで来る。戦闘が落ち着いてから古兵殿に聞いた話によると、曳光弾一発の間に実弾が四、五発飛んでいるとのこと。暗くなり、弾の音もしなくなり、車の下からはい出して見ると、その車は彈藥車、今になつて思えば全く冷汗ものであった。

それよりハマコーザに向け行軍開始、興安嶺の山中露営を続けたが、糧秣もなくなり、ある日、敵の輸送隊と戦つた際、生きた牛を頂戴し、飯ごうで塩味だけでぶつ切りにして煮て食べたが、それ以来歯を全く駄目にした。

二十日ごろ、雨の中を行軍中、トゥモロコシ畑に遭遇、生のまま三、四本丸かじり、いくらか胃袋が満足してくれたものと思われる。二十五日、哈什台の戦

闘が始まり、我が小隊は大隊砲の弾がなく、連射砲にて敵戦車に向かったが、何ぶん敵さんはカチューシャ砲、戦車砲で撃つだけ撃つとさっさと引き揚げるので、気持ちは焦ってもいかんともしがたく、結果は勝利と聞いたが、今にして思えば、私たちの仲間の戦死者はいずれも八月十五日終戦後であつたことが悔やまれて仕方がない。

八月二十八日、興安嶺を抜け、音德爾にて初めて村落で露営。私は二十九日早朝、馬当番へ帯剣一本で馬の世話。昼過ぎ交代者が無装備で来て、お前たち帯剣を早く始末しろとのこと。いやはや、我々が初めて戦闘した西口戦の次の日に日本は連合軍に無条件降伏していたとは。この日限りで愛馬、大隊砲とも別れることになった。

今度は王爺廟おおひげようを経てチチハルへ、そして日本へ帰る口を待つだけのはずが……。九月の始めより十月下旬までチチハル郊外でそれぞれバラックを建て露営生活。明治節（現文化の日）のころ、千五百名単位で大隊編制して移動すること。私たちは第十五大隊として

貨車に詰め込まれ、満州里經由でソ連領土へ。だが、いまだ希望を捨てず、シベリア鉄道にてウラジオオストックから乗船帰国するのだと一縷の望みを持って貨車にゆられていたが、チタ地区ハタブラクにて全員下車、ダモイの夢も破れ、自分たちで収容所の周りの穴掘り、バラ線の堀を造り、抑留生活が始まった。

間もなく五百名が他の地区へ移動、千名が越冬することになったが、何分、食糧は黒パン若干とスープ少々では栄養が十分なはずがなく、おまけに南京虫、虱の大発生、熱病、下痢などで、冬を越す間に半数の五百人以上が死亡。埋葬するにも厳冬の中、地面はコンクリートのように固く、墓穴も掘れず、素っ裸にして雪を被せただけ、翌春、雪も消え穴掘りのできるようになってから埋葬したが、白樺の木で急造した十字の墓標が裏の山に林のように林立した。

長かった冬もようやく去り、春先ともなると杏の花が咲き、いくぶん落ち着きも取り戻してはきたが、まだ定まった労働もなく、毎日馬鈴薯倉庫で芋の選別、一般家庭の薪割り、その他を交代で行っていたが、日

曜日の休みの日でも、山火事（野火）が発生すれば、即刻スコップと竹ぼうきを持ちトラックに乗せられ、消火に出動させられた。

そのうち他の収容所への移動が決まり、貨車に乗るまで四列縦隊で行進させられると、沿道のソ連兵や住民が私たちを一人ずつ頭を撫でるので不思議に感じていたら、以前日本人が帽子の中に腕時計を隠していたのをソ連兵が見つけ、それから頭を撫でるようになったとのこと。カラングイを経てブカチャチャで貨車から降ろされ、大きな鉱山のある収容所にたどりついた。何でもオリフラム（タンクステン）の鉱脈があり、その採掘が正式に決まった作業とのこと。

一日八時間労働の三交代で、数十名が一個班に編制され、それを、切羽の鑿岩機組、交代した前の組が発破を掛け、飛び散った鉱石をトロツコに積み込む組、鉱石でいっぱいになったトロツコを暗闇の中をがむしやらに押しして坑外に運搬する組とに分けられた。初めに私はトロツコ組に入れられ、毎日カーバイトランプ一個持たされ、一日数十回、坑道の中の線路上をトロ

ツコにつかまり走りまくった。何しろ路線といつても継ぎ目も粗末で脱線する場所が数カ所あり、脱線しようものならトロッコの前部に掛けている鉄製のカーバイトランプが吹っ飛び、真つ暗な中で次のトロッコが来るまで立ち往生。二人がかりで復線、お互いにノルマに影響したこともしばしばあった。

その後、積み込み組に換わり、前の組が発破を掛け、交代したあと、先に坑内に入り、切羽の下の盛り上がった鉱石を鑿岩機ですぐ仕事できるように根掘りをするのの仕事の始まり……。

その日も他の人より先に切羽に着き、同僚と二人でスコップを持ち鉱石をかき始めたまで記憶しているが、突然腕に猛烈な痛みを感じ、何か大声を出して叫んだ途端目が覚めた。発破を掛けた後のガスが鉱石の間にまだ残っていたのをスコップでかき回したのだから、二人ともガス中毒となり意識をなくし、遅れて入坑した積み込み班の人たちにトロッコに乗せられて外に出され、坑道入口付近にマグロのように寝かせられ、注射を打たれた途端に気がついた。それ以後は十分余裕

を見て仕事に掛かり、ガス中毒には十分注意をした。

さて、最後は鑿岩機の番。鑿岩機は、エアークンプレッサーにより空気を受けノミを回す。二人で八本穴を掘り、ダイナマイトを仕掛け、発破を掛けて次の組と交替する。ノミの長さは一メートル五〇センチものを使い、根元まで掘った穴が一本分である。ノミの中央には水を通す穴があり粉じんが少なくなるようになっていたが、何ぶん交代までに八本掘らなければならず、早く仕上げる関係上、水を通すと能率が上がらず作業がはかどらないので、一回も使用しなかった。そのため作業現場付近は粉じんが舞い、鼻の穴の中はすぐコンクリート詰めのように塞がり、小指の先で抉り取りながらノルマ達成に邁進した。そして発破を掛け、交代するわけだが、何ぶん相手は岩盤、時間ぎりぎりに一メートル五〇センチ掘り上げても、層が固い場合は七〇センチくらいしか飛ばない場合もあり、岩盤が比較的軟らかいと普通よりも早く八本掘り終わり、いくぶん余裕を持って発破を掛けると一メートル六〇〜七〇センチも飛ぶ場合がある。

ノルマは飛んだ距離で決められるので、苦勞してもニエハラシヨ、案外、楽に掘つて余裕があつてもハラシヨラボータ。私は平均して比較的軟らかい岩盤に恵まれ、二十三年の初めごろ、ハラシヨラボータで休息の家（一週間仕事をしないでぶらぶらしている）で過ごしたこともあつた。ただし、一旦具合が悪くなつても、発熱するか栄養失調で尻たぶらがぶよぶよになるか、とにかく見た目の症状が悪くなければ軍医（女医）は絶対に休ませてはくれず、神経痛やリューマチなどは病気のうちに入らなかつた。

二十三年四月ごろよりはソ連兵の衛兵所の警戒も大分緩くなり、独りで収容所の外に出て町をぶらつくことも許され、ダモイの二カ月ぐらい前ころから炊事当番となり、鉾山から解放された。炊事の作業は、豚の足、牛の頭から肉片を切り離しスープ作り。黒パンは作業人員、ノルマに應じて分配すれば作業終了。このころから東京ダモイが本格的に囁かれるようになった。七月ごろ、各人私物を持つて広場に集合せよとのこと。ダモイには数回騙されているので、今度も別の収

容所へ移されるのかと半ば締めながら貨車に乗り、揺られながら何となく今までの収容所生活の出来事が断片のように脳裏をかすめた。コックリさんをやつたら五日帰れると示されたから、来月の五日は帰れるぞ、翌月五日が過ぎると、あれは「いつか」の間違ひだったとか、日本軍一個小隊が整列して正面衛兵所を突破、警戒兵が静止を命じ銃撃しても反応がなかつた、あれは日本軍の幽霊部隊が出たんだという噂とか、また、洗脳教育で日本新聞が配給されてもろくに読みもせずタバコの巻紙になつたり、嚴冬の夜、便所に行きたくても、便所は収容所の端にあつた関係上部屋を出た途端に放水開始、途中で終わつて引き返す。翌朝、便所までの途中いく筋もの線が引かれていたなど……。

乗車数日後、仲間が停車駅を見て、ここはハバロフスクだ、この列車は間違いなくナホトカに向かっていると言う。その瞬間、車内に何とも言われない喚声が沸き上がった。数日後、列車はナホトカ着、一同下車。これで帰れると安堵したが、敵さんも簡単には解放してくれなかつた。朝起きると寝るまでスターリン万

歳、我々は闘士となり、日本国民のため、共産主義のため闘うことを誓うなど、毎日他人の目を気にしながら自己ピーアール。ここで反動分子と見られたら折角たどり着いたナホトカより逆送され、別の収容所へ連れて行かれた方も多数いたと聞かされ、乗船するまでの日々のかに長かったことか。

幸い反動分子とも見られず、八月二十一日乗船、出航。天気も良かった関係で、船室にも入らず甲板に横になり、船の周囲を泳ぎ回る飛び魚を眺めながらぼんやりしていたようです。

八月二十三日、舞鶴に入港、検疫を済ませ棧橋に第一歩を乗せたとき、これで本当に帰ってきたのだ、そして第一印象は、迎えてくれた日本のお母さんたちはこんな背が低かったのか？足かけ四年も背の高い肥ったソ連のマダムを見つけてきた関係か。

舞鶴駅より復員列車で上野駅へ。それより東北本線に乗り換え、一般乗客と一緒に盛岡を目指し、専らデツキから車窓の風景を眺めながら、これでノルマに追いかけられる必要がなくなつたんだという思いでいっ

ばいでした。しかし、偶然という事柄はどこにもあるもので、盛岡も近くなり列車が黒沢尻に着いた途端、私の叔母が目の前に乗車してきて、お互いにびっくり。そしてただ一言「元気でなにより、家に帰れば何か変わったことがあるかも」と言つて花巻で下車。私は、入隊前から母が血圧も高く具合が悪かつたのであるいはと思つていたが、盛岡駅に到着すると一番先に母が、そして弟妹が迎えに来てくれた。先ほどの叔母の話は何かと考えながら、四年ぶりで我が家に落ちつき改めて母に聞いたところでは、昔の甲種合格で頑丈な父が二十二年四月一日、あの思い出の青森操車場で殉職したとのこと。本当に世の中はままならぬものと感じた次第です。

九月十六日、盛岡に台風が近づいているとの天気予報を聞いてはいたが、釜石駅に復員の挨拶と復職の相談のため、雨の中、山田線に乗つたが、列車が区界を過ぎるころから風雨ますます激しくなり、走つては止まり、走つては止まりを繰り返しているうち、腹帯の駅に着いたときは川の水かさが増し、これ以上前進不

可能となり、乗客全員高台にある屋敷に避難。眠られぬ一夜を過ごし翌朝駅に行つて見ると、列車は見事に転覆、開通の目途も立たず前途多難。結局八時間かけて宮古まで歩き、釜石行きを諦め、漁船を頼み海路八戸經由盛岡へ。

その後、盛岡管理部出納係を発令され、五十六年四月一日定年退職まで、盛岡鉄道管理局にお世話になった。

復職間もなく東京旧丸の内ビルに進駐軍に呼び出され、二泊三日で抑留中の実情を聞かれ、実際に労働してきた自分よりも細部にわたり調査済みの情報網には驚かされましたが……。

私自身、抑留中の鉾山労働が崇り胸の難病にかかり、病院に入退院を繰り返していましたが、命永らえて現在に至っております。若くして散った戦友その他の皆様の御冥福を祈ります。

## 暗黒の思い出

熊本県 白井鉄郎

今年も暑い夏がやってきた。思い出すまいと思つても、消すことのできない暗い思い出。戦後五十年の節目とか。それにつけても終戦の日が近づくとまず原爆被災者のこと、次いで中国戦線、南方戦線の戦死者のことがマスコミに取り上げられてくるが、北方戦線で終戦後ソ連に抑留され、酷寒の地に過酷な労働と飢えのため、母国に帰ることなく万斛の涙をのんで凍土に埋められた六万と言われる人々のことは、あまり語られることがないのはなぜなのか？

七月の初め、旧制中学の同級生であり、後にわかつたが、同じ部隊に所属した戦友でもあった熊本県連会長高瀬潤吉氏より電話があり、シベリアの抑留記を書いてみないかと言われ、忘れようと努力してきた暗い過去が改めて思い返され、亡き戦友のためにも、今は